

を絞っているのや、可愛らしい犢こしの牧場ぼくばうの一遇ひとあひに飛び廻まわつて居る光景さまや、蓮華れんげ畑はたけをのそくど牛群ぎゅうぐんの逍遙せうぎやうしてゐる處はどうしても南歐なんおうあたり、暖國ぬあつくの谷景色やけしきが聯想れんさうせらるゝ。總して原村はらむらの自然と人生は良く調和てうわして居る餘裕よゆうがあると私は思ふ、民心みんしんの動搖どうぎやうは唯ただかりそめで早晚さうばん自覺じかくの來るのは充分信じて疑はない、茲こゝに赤煉瓦せつれんがの機械湯きけいゆが立つて漂々ひたひたと黒煙くろえんを虚空こくうに吐かない限り、單純たんじゆんな農的生活のうのくわつの最終さいしゆを告げん間は鼓ヶ浦つづみに打つ浪は永劫えいけつに美しく清らかであらう。

タイムは刻々と永遠とこに渡つて逝く、雪が消ゆる頃には長閑ながかんかな春の日影ひかげが射す、五月の花が凋しむ頃には眞夏まなげの炎帝えんていが白い沙濱さひんにカン／＼と陽炎やうえんを燃やす。昔し村の經營けいぎやうに盡力じんりきした人々の内には向山むかやまに一片の紫煙むらさきえんを棚引たなひきかしたものもあるし、南椽みなぐらに日和ひなぼつこの長閑ながかんな夢ゆめを見ているものもある、「時」は一刻も吾々われらを用捨もちすてしない。「質朴しつぱくな村の實在じつざん」それは暫し時流じりゆうにさゝやかな渦うずを卷まいて居るけれどもやがては淙々そうそうの響こゑをなしつゝ、僞いつはりらぬ自然しぜんの懷こころに、物穩ものうだやかな「生」の戦いくさをつゞけ逝く事であらう。

(完)

谷 底 へ

山の 入 譯

十二月ベルリンで開かれた獨逸劇場同盟の委員會には昔懐しい私の一親友も出席していた。彼はオスカル、ワルターといつて、數年來、既に場末の或る劇場に入つて居たが、今度その劇場の委員と

して派遣せられたのである。初めて會つた日の夕方、我々は演劇見物にと行つたが。それがはねてから、手を取り合てフリドリツヒ街に出た。この大都會の生々した活動は騒々しく我々の周圍に漲つてゐる。舞踏會、演劇、其他種々の興行物が今丁度はねたのであらう、千、又千を以て數ふる男女は、網の目の様な大市街の本街に期せずして相會したので、無數の群集は、喋々、喃喃、或は笑ひ、或は叫喚いて、街の兩側を練つて行く。

「僕は弛緩くて仕方がないよ、こんな喧噪に慣れて居ないんだからね。何處か閑靜な所でも探して緩り懷舊談でもしやうぢやないか。」

友は私に斯ういつた。

然し何處へ行かう？、この附近の名ある料理屋は今頃必と充滿であるに相違ないので、打解けた談話にはどうも適かない、何處へか行のうか、と相談してゐる所へ、一人の男がやつて來て、いきなり、青い小形の切符を突き付けた。

友のオスカルは、笑ひながら、提灯の光で讀んで見た。その文句は斯うだ。

料理店〔夕星〕

一 弊店は、市中第一の休憩所なり。

一 弊店のビール、御酒は純良無比なり。

一 弊店は、懇切、丁寧を旨とす。

一 弊店は、特別廉價を旨とす。

ベルリン………街………番。

友は椰揄ひながら。

「君の所は余程便利だよ。何處へ行かう。彼處へ行かうと相談してる矢先きに、市中第一の休憩所」が突き付けられたではないか。さあ、一つ行つて見よう。恐らく閑静な所だらうよ。」

間も無くして、我々は〔料理店タ星〕の卓を圍んで。泡立つビールの大盃は、柔軟な手によりて、我々の前に運ばるゝのである。

卵の形は皆同じものだ。料理店〔タ星〕も、破れた赤天鵝絨の座床、薄暗い洋燈、不潔な帷張、濕りつばい、不愉快な空氣、さては媚かしく装ひ、秋波を浮べて、絶えず睨々と、客の顔を見る様な酌婦の巢窟たる、有名（とても賛辭を呈しよう）な居酒屋と何等異なる所を見ない。

これ位は、さまで悲しくもゐいが、側に居て何彼と五月蠅い酌婦、隣室から響く調子はづれのピアノの音が、演劇や、新作、俳優のことや、其他之に類せる種々な談話を妨害つたのには實に困つた。すると突然酌婦は我々の談話を遮つて、ビールの勘定を乞うた。そうして口早に續けて。

「あの今日は丁度お休で、これから舞踏にまいりますので。」

斯ういつて、彼女は空のコップを運んで行つた。その際斯う注意した。

「その代りにフランチスカ嬢が給仕をしますよ。」

やがて、（我々は驚いて見上げた）若々しい、繊細な一人の少女が、我々の卓に近いて、丁寧にビールのコップを差出した。我々の驚いたのも無理はない。こんな所に居さうもない美人だもの！顔は少

し青白いが、氣高く見ね、緑の髪は、一寸束ねて総々と後へ垂れて居る。ぼうつと頬の所が赤味を帯びて居るのは、いくらか羞いのもあらう、着流した簡略な衣服は綿の様な手足を包んで居る。然も、最も人の心を動かすものは、その花を欺く美さではない。絶えず、人の同情を惹く顔付である。ばつちりとした、黒目がちの小供らしい眼である。その眼には、人知れぬ悲哀と心配とが溢れて居る様にも見ゆる。

ちらと友の方を見たときに、彼女の顔には、さつと憂の波が立つた。直様身を返して我々の室を出で、しまつた。

ワルターは彼女を見送りながら、私に尋ねるかのやう。

「はて、何處で僕はあの顔を見たんだらうね！彼女は元來、この〔市中第一の休憩所〕の給仕ではないのだ。あの顔付やら、素振やら、何處か不安の様な點がある！僕は今日初めて遇つたのではない。が、いくら考へても思ひ出せない。」

と齒痛さの餘り、彼は丁と卓を叩いた。

注文を聞かうと思つたのか、彼女は突然又入つて來た。

「お客様、何か差上げましょうか？」

俯きながら斯ういつたときに、彼女の顔は又さつと赤くなつた。

その柔和い、通りの良い聲を聞いて、友はやつと記憶を呼び起した。彼は吃驚して。

「バレンタ嬢！的つたらう、それでも違つたかね……貴女がこゝに、ね、まあ如何してこんな所に

羞さの餘り、彼女はばつた眼を落した。

「は、こゝにワルター様、こゝに。」

彼女は打沈んで答へたが、もう涙ぐんで。

「ほんとに、こんな所で、わ目にかゝらねばならぬ様になりましたよ、貴郎、妾のことを、どうれ思ひなさつて！」

友は立上りて、女の手をしかと握つた。

「御安心なさい、ベルント嬢。」

彼は更に、同情に満ちた調子で。

「さあ、も少し、こちらへ寄つてわ掛けなさい。相變らず御壯健でしよう。」

彼は、私の方へ振り向いて、斯う説明した。

「君は、僕が三年前に、ベルント、フランチヌカ嬢と、ミューンヘンの帝室劇場で、一緒に居たとい

ふことを承知してくれねばならぬよ。其時ベルント嬢は、まだ、ほんの初歩で、小劇場の方が技

を練るにも都合がよく、才能を發揮することも早からうといふので、そこを去られた。其後は殆ん

ど消息も無く、この頃は全く様子が分らなかつたが、今こゝで突然遇つて吃驚した様な理由さ。」

彼女は畏づ畏づ卓の側に腰を下して、涙ながらに、苦しき一條の物語をなした。隣室よりは盃の音、

高らかな笑聲が響き、「ボカチオ進軍」の曲は誰が奏するか頗る調子が好い。風が時々、ぶる／＼と

窓を動かす。

私は、彼女が談りし身上談を今茲に操り返して見よう。

ベルント、フランチスカは、プレスローの一收税官の女であつたが、十七歳の時、劇界に身を投じた。彼女は自らの才能を信じ、數年ならずして、劇界の重要な地位を占めんことを期してゐた。

(大抱負は奇麗である。されど、樂しき夢の破れたる後はどうであらう) 彼女はプレスローの劇場からミューレヘン帝室劇場へ移つた。されど、上に延べた理由によりて、其處を去つたのである。再後二年間は、他の小劇場に關係して居たが、この間、悲しき出來事は續々と起つた。彼女の父は鑑一文遣すでもなく、程なくして鬼籍に入つた。(彼女の母は、既に、久しい以前に死んで居た。) 今や、廣き世界に彼女は恐しくも唯一人殘されたのだ。親戚の人々は、全く手を退いてしまつた。去年の夏中は、或る劇場に居たが、最早、一つの職業も見付からないので、直接、周旋人に頼まむとて、ベルリンに來た時は既に秋であつた。今は一時も早う職業を得やうと、劇場周旋人の訪問を始めた。身震する冬は、日、一日と近くのである。心の悩み今は慰むべくもあらず。一週二週と過ぎて、働きを得ぬ恨めさよ。人は何故に、一落葉の餘地だに彼女に残して置かないのだらう。月日の駒は用捨なく駆け、僅かの貯蓄は何時しか散じ、衣類、裝品に到る迄、遂に賣り拂ふの悲境に落ちてしまつた。

頼の綱も今は絶え、周旋人は、遂に一つの餘地も望むべからずと宣告した。運命の手は彼女に爛布を纏はして絶望の淵に沈めんければ止まぬ。フランチスカは孤獨、全く孤獨となつた、喧噪い不知

の大都會で、萬人に見捨てられてしまつた。人は半氣に、彼女の側を通り過ぎて同情の影も見せぬ。誰が、親切なる忠告と、慈愛に満てる助力とを恵む者が有らうぞ。彼女の心を汲み、慰めてくれる一人の人、天に地にも一人の人が、如何ばかり欲かつたであらう！雪と暴風は近いて、北風は身を切るばかり、飢餓は既に彼女の身邊に寄せたので、今は終日終夜、口を他の方面に探さんければならぬ。恥辱と卑賤とを論じて居る餘裕は到底無かつたのである。されど如何せん是も亦遂に空しかつた。生活の急迫は斯くまで大であるのに、人は信せず、嘲笑を以て彼女を迎へたのである。

失望の果は呆然自失、人は頼むべからずと、天井の低い、冷きつた小室に歸つて來た。力なく窓に凭れて、一樣なる屋根の海、燦りたる煙突を見るときもなく見やつた。囂々と騒いのは下界の街である。人は皆、已の職業に急ぎ、彼女獨りは捨てられた孤兒である！

就職の希望は全く絶え、黑暗々の未來を夢みて身震したときに、彼女は大奮發を以て、最後の手段を取つた。邪険な桂庵の手を経て、あはれ、酌婦となり下つたのである。かくて、彼女は二日以前に〔夕星〕に來たのであつた。

心の悲哀やる瀬なく、途切れ／＼に、彼女は大略もの語つた。今の境遇に談し及んでは、涙に咽びて、熱した頬を兩手で蔽うた。彼女は涙をほろ／＼と流して。

「貴郎、何とか考へがた有りなすつて！が、もう所詮辛抱しきれませんよ。こんな辛い目に遇ふより、一そ、し、死んだ方がましだと細ひます」

我々はこの興奮せる小女を宥めて、衷心から同情し、助力しやうといふことを誓つた。友のワルターは、も一度周旋人を敲かうといひ、私は、善良な家庭を探してやらうと思つた。兎に角近々喜しい報知を齎することが出来やうといつたときに、彼女の顔は俄に輝いた。されど、これも一瞬間に過ぎなかつた。彼女は再び想ひに沈んで微に歎息をついた。

翌日の夕刻、ワルターと私は打連れて「夕星」を訪うたが、フランチスカは最早姿を見せなかつた。一人の酌婦の答へに依れば、昨日のこと、數人の客が無體な振舞を爲すのを、主人は敢て止めやうとしなかつた。それなり、そつと逃げ出たまゝ、今は住所も知れないといふことであつた。

一種不安の念は我々の心を襲うた。然し、何處に如何して今彼女を尋ねやう……警察の手を煩すも面白からずと、止むなく翌日に延期することにした。我々は徐々、霧深い、濕つぱい街を歩いた。何處も早や復活祭の準備が整うて居る。疑懼の念は、遂に我々の心を去らぬので話し出す元氣もなし、無言のまゝ歩み續けた。

翌朝早く、ワルターの使から一通の手紙を受取つた。忙い奔走の甲斐有りて、劇場の理事長から、フランチスカに、なほ幾分の職業を與へてもよいといふ報知を得たと書いてあつた。私は直に市役所の住所係を訪うた。恐らく、届けてあるまいと思つたが、幸にも役員は暫し探して「カウスセー街メービン方の四階」と、かう教へてくれた。

三十分も経つた頃、私は四階の梯子を昇つて居た。一段は一段と歩調が緩くなつてくる。胸の邊は何かを押へ付けられたかのやう。足には重い分銅でも下つて居る様な感じがする。階上に着いたところ

で、私は鈴を押した。呼吸ははづみ、手はぶる／＼と震へた。足摺れの音がして、戸は静かに少しばかり開いた。その間隙から、だらしない風をした老婆の、醜い皺だらげの顔が見えた。

「ベルント嬢に一寸遇ひたいのですが。」

私は、非常に性急に斯う尋ねた。

老婆は驚いた風で、鈍い眼でじつと私を見た。恐らく是迄誰もフランチスカを訪うたものはなかつたらしい。

「ベルント嬢に面會たいとたいひですか？あの方は一昨日、た亡くなりましたよ。」

老婆は、冷やかな聲で斯う答へた。

「ね、死んだんですか？………」

私は思はず叫んだ。

「はい、あの方は投身なさいました。今日ドロテーンの墓地に運ばれましたよ。」

戸はびしやりと閉つた。萬感胸に溢れ、私は打慚れて外へ出た。息むこと無き四周の活動は、一つも私の眼には見えない。只、もう、あの憂に沈める、罪無き二つの眼が絶えずちらついて、この世は何故に斯くも不幸と悲哀との世の中であるのだらう！佳人は何故に斯くも薄命に泣かねばならぬのだらう！と、訴へて居る様に見ゆる。

吹きすさぶ北風は、雪さへ驅り立てゝ來るのである。その雪のいくらかは、私の眼に入つて、確に融解たらしい……

「あはれ薄命のフランチスカ！」

私は低く斯う私語いた。

風はこの聲を捕へて、廣々と荒れ果てた草原の、物淋い墓所へと運んだ。その聲は、新しい土饅頭の側なる垂柳に留り、枝間に籠つてなほ泣いて居る。

「あはれ薄命のフランチスカ！」

(終り)

有感 二首

松浦寅三郎

勸學兼勤儉
皇謨萬古尊
唯知天職重
禍福不須論
此地敦風教
學徒多滿門
臨饗莫他技
唯有赤心存

長詩

熊本市郊外景物詩

江中紫秋

秋の日午後二時過ぎの郊外に佇みしとき、